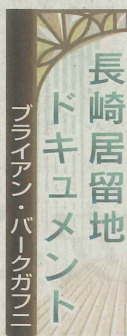


淡路屋ツルの真実

グラバー 妻は大分出身か

淡路屋ツルはトマス・グラバーの生涯の伴侶であったが、二人は正式に結婚することなく、ツルの出生や家族歴についても不明な点が多い。明治27(1894)年、ツルは初めて戸籍を作成して「淡路屋」を名乗ったが、これは本来の姓ではなく、娘のハナと養子の倉場富三郎が日本で確固たる法的地位を得るための措置の一環と思われる。



長崎居留地
ドキュメント
プライアン・パークガニ

■27■

同戸籍によると、ツルは「大月又助」の長女として嘉永4(1851)年1月9日に大阪市新町で生まれ、その後淡路屋安兵衛「の養女になった」と記されているが、裏付けとなる証拠は見つかっていない。

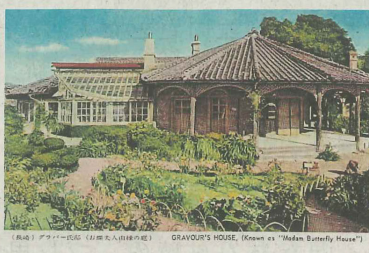
他方、彼女は大分県出身とするかなり信憑性の高い記述がある。昭和24(1949)年、義理の曾孫に当たる野田平之助氏がツルの経歴を次のように新聞記者に伝えている。

「大分県竹田村岡城御普請大工中西安兵衛の娘としてツルさんは生まれ、15歳の時同町の山村國太郎と結婚して山村ツルと名乗り文久3年娘ゼンを生んだが、しゅうとめとの折れ合いがわるくそのうえ夫國太郎の乱行にあまりかねて離婚して大阪で一年ばかり芸者をしたのち長崎に渡り、ここでも芸者をしているう

オペラ「蝶々夫人」とは無関係

ち、当時の三菱造船所の技術顧問をしていた英人グラバー氏と結婚、東京で49歳を最後として華やかな環境の中に死んで行った(昭和24年10月2日付「長崎日々新聞」、原文のまま)

胃がんを患っていたツルは、明治32(1899)年3月23日に東京の自宅で波乱万



長崎居留地、旧グラバー邸(現長崎市立美術館) GRUBBS' HOUSE (Known as "Helen Grubbs' House")

旧グラバー邸を描いた戦後の絵葉書。「お蝶夫人由縁の庭」と記されている。GLOBEのついでに間違っている(筆者蔵)



淡路屋ツル。袖に蝶のデザインが施されている(筆者蔵)

丈の生涯を開いた。妻を亡くした当日、トマス・グラバーは、三菱二代目社長の岩崎久弥に手紙を送り、次のようにツルの死を急報した。

「敬愛なる男爵殿。妻が今朝4時15分に他界しました。長与先生と大橋先生が立ち会

われしました。とても静かな最期でした。遺体は葬儀に付し、長崎にもつてゆくつもりです。さあたつてツルの妹と一緒に葬ります。もう一人グラバー自身」が亡くなったときも長崎で埋葬され、そのよき伴侶とともに眠ることになるでしょう。敬具(筆者邦訳)

戦後、旧グラバー邸に居を構えたアメリカ人の進駐軍関係者は、遊び心で「マダム・バタフライ・ハウス」という愛称を同住宅に付けた。進駐軍が去り、三菱長崎造船所が旧グラバー邸を長崎市に寄贈した後、この愛称は観光名所として活用しようとした当局の注目を集めた。郷土史家たちは写真から淡路屋ツルが袖に蝶の紋章をあしらった着物をよく着用していたことに気づき、これを口実に旧グラバー邸を「蝶々夫人とゆかりの地」として宣伝することにした。

近年、グラバー家とオペラ「蝶々夫人」との間に正真正な歴史的関連性はないことが証明されているが、淡路屋ツルやその他の家族メンバーの真実を明らかにするためには、さらなる検証が必要である。

(グラバー園名誉園長)

月1回掲載します

娘ハナの結婚を祝うトマス・グラバー(前)とその手前に立つツル夫人。明治30(1897)年、グラバー邸の前。カラー加工(ナルド・ベネット氏提供)